



日本大学三島高等学校

同窓会会報

第 10 号

昭和56年3月2日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会 発行

交友の場を求めて

会長 高田 菊平



まずはじめに、同窓会員の皆様に悲しむべきご報告があります。

昭和五十六年二月十四日、第二代目校長であり、また前同窓会会長であられた、玉津徳太郎先生が御逝去されました。先生の御冥福を会員の皆様とともに祈り申し上げます。

先生は、同窓会育成のため大変に力を尽くされ、大きく躍進した時、私に会長の役をゆずられたのであります。先生がしめされた同窓会に対する情熱を忘れることなく、我々会員は全員で協力し、さ

らにこの同窓会を深味のあるものにしていかなければなりません。ここにあらためて決意するものです。

さて我が同窓会も既に二十一期生をむかえることとなりました。

この二万余名の会員をかかえる大世帯になった同窓会を、どのようにお互いを結びつけ連携をとっていくことができるかは、同窓会活動の恒久的課題であるでしょう。

そして、我々はその一手段としてのいろいろな団体とのつながり——支部であり、職域であり、学年であり、学級であり、部活動であり——それらの単位の団体のお互いのつながりをいかに有意義に結びつけていくことができるかにあると思います。

これらのうち、それぞれ地域別に分けた各支部活動を、それらの主なる母体として進めてきたが、幸にして、各支部の支部長を中心

として各役員の皆様方の奉仕によって、継続的にその活動を続けることができていることは大変にありがたいことであります。これが我々同窓会活動の心臓であり、そしてさらにその力をつけていかなければならないと願うものであります。

日本経済新聞の交遊抄という欄を毎日読んでいます。が、それらは毎日筆者が変わりますが、それぞれの文は、人と人とのつながりを主体にし、そして現在ある自分がどのような友とのつながりでその一担があるかを、また、今おつきあいしている人達との間について書かれています。それらのほとんどが、もちろん仕事を通じての生涯の友や恩師とのこともありますが、それぞれの時代における同窓生であったということから、お互い

会長

高田菊平氏の紹介

氏は、昭和五十三年の四月、前会長の玉津徳太郎先生の後をうけて、第三代目の会長として就任しました。本校の第一期卒業生であり、現在、ニュー・デルタ工業株式会社の専務取締役として、大変に多忙な日々を送

っています。

氏の誠実な人柄は、同窓会員の誰もが慕うところであり、氏を中心とした同窓会の和は、実に深いところで結び合っているのです。

現住所は、三島市西若町九〇二三(電七五—〇三七六)です。どうぞ気がるにたよりなどをしてみてください。氏も心から望んでいます。

にはげましあい、心の友としてきたことによる結果について、多くのペンをはしらせているのであります。

これらの文を読むたびに、つく

づく同窓生とのつながりが、人生の中でどんなに重要な部分を占めているかを、いろいろと感ぜずにはいられないのであります。

(第一期卒)



四代目校長に

北岡 功先生就任

昨年の四月、橘和彦先生の後を受けて第四代目校長に、北岡功先生が就任されました。我々同窓会においては顧問になられるわけで、先生とともに同窓会発展のために大いに頑張りたいところです。

母はひとり 母校もひとつ

校長 北岡 功



早いもので、皆様の後進の士をこの三月二日に第二十一期生として世に送ることになりました。願れば本校も開設以来二十三年の星霜をかぞえ、宗家の日本大学も九十二年目を迎えることになったのでございます。

日頃、高田会長を中心に暖い眼で母校の発展に寄与して頂いている皆様のご厚意に対し、折にふれ感謝申しあげている我々でございますが、殊に五十二年以降、在籍生のための奨学金制度を敷いて頂いたことは、この上ない欣びとしてお受けしている所でございます。

また、近隣の県・私立高校の新設に伴い、今後の行方を真剣に睽めていかなければならない状況と

見合って、中学部会の充実をお図りくださったことにつきまして、例会の都度得る所が多く、ここに更めてお礼申しあげる次第でございます。

ごく限られた予算にも拘らず、運命協同の合言葉のもと、夫々の支部会の運営に当たられ、その都度同窓教職員はもとより、恩師として我々までもお招き頂き、いつとときの歓談の中に皆様の夫々の地域に定着したご成長ぶりを伺うにつけ教師の冥利をひしひしと感じているものでございます。日大三島はひとつしかなかったのだなあ、その母校でのキャンパスで出会った同窓および師弟の絆がこれほどまでに美しいものだったのかと、そのあとしみじみと感傷にふけるものでございます。

私が申しあげるまでもなく、これからは組織の時代でございます。もちろん同窓会もその一つでございます。その同窓会に投機することによって更に大きなお一人おひとりの成長、すなわち幸せにつな

げていくって下さい。そして同窓会をフル回転させることによってその生産性と創造性の中でご自分の拡大を試みていくって下さい。

同窓会の組織をただの目的そのものにしないで、ご自分の利益につながる手段として没入してみてください。それがひいては同窓会のより大きな発展と共に、個人の幸福に還元していくものです。この観点に立ったとき、はじめて同窓会へのパッシブな先入観も消し飛ぶはずだと申しあげたいのです。どうかゆえなく背中を向けておられる方がたに啓蒙してあげてください。組織は、同窓会は、最後は個人に奉仕するものだ、と。

たとえ一人や二人の腕が太くても、その成果は自明です。全員の小さな力の結果が、あの綱引きゲームが証明する通り、最後は凱歌をあげるものです。殊にUターン現象の多い昨今、この小さな結果こそ大きな意義をもたらすことを若い後進の諸君に呼びかけてやってください。母はひとり、母郷も一つ、もちろん母校もたったのひとつなのですから。

遂々、日頃の教師ぐせが出て説法じみた話しになりおわび申しあげます。めまぐるしく移り変わる内外の現実には押し流されることなくまず兄弟で、いや、その兄弟よりも血の濃い同窓の絆で固く強く、立ち向かって頂きたいと願うばかりの老いの繰りごととしてお見のがしください。皆様のご健闘を心からお祈り申しあげます。

積極的な参加を

幹事長

遠藤 日出夫



月日のたつのは誠に早いもので私が幹事長の任をお引き受けて三年がたちました。その間に、同窓会員も二万名を超えることになり、二期生である私も大いに驚いているのであります。がしかし、

その驚きの中に、我が母校の生命力といえますか、頼もしさといえますか、何か言葉にはならぬ感動を覚えるのであります。そして、同窓会のありがたさの様なものを年齢を経るにしたがって感じてきているのであります。高校や大学を出たばかりでは、まだ身も落着かないであります。しかしいつか心の落ち着きを得た時、また逆に、人生の忙しさに追われている時、母校を通しての友とのつながりは、必ずや安らぐものでありましょう。今あらためて、二万名を超える会員の一人一人が、自分の人生と母校のつながりを考えねばならぬと感じます。

今年第二十一期生を迎えることになったのでありますが、どうか以上のことを忘れずに頑張ってください。

幹事長

遠藤 日出夫氏の紹介

昭和五十三年四月、前幹事長の高田菊平氏が会長になった後を受けて、三島支部長であった氏が、第二代目の幹事長としてその役に就きました。

氏は、本校の第二期生であり、高校時代はバスケット部員として大いに活躍し、その大きなバイタリティーは現在もお失われていません。実に男っぽい実直な人柄はまさに幹事長にふさわしく頼りがいのあるところですよ。

現在は出身地の長泉町で、割烹「静山荘」を経営するとともに、「日刊静岡」の支局長をも務めて持前の起動力をフルに発揮しています。

現住所は、駿東郡長泉町中土狩七〇七の二（電 八六一六三三四）

訃報

母校顧問・第二代校長
前同窓会会長

玉津徳太郎先生 御逝去



玉津徳太郎先生略歴

昭和五十四年九月以来、日本大
学駿河台病院に入院加療中であつ
た、玉津徳太郎先生が、昭和五十
六年二月十四日御逝去されました。

先生は、母校同窓会育成のため
にも特に力を尽くされ、地域的に
十支部に分けることで、活動をよ
り具体化させました。それ以来充
実した会の運営がされていきます。
先生の御冥福を、深く心からお
祈り申し上げます。

昭和三十九年四月
母校校長に就任

昭和五十二年四月
文理学部（三島）次長

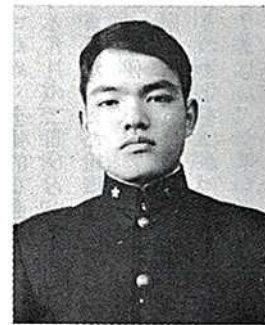
母校校長を兼務

昭和五十二年十月
母校校長職を解かれる
母校顧問となる

第二十一期生 歓迎のことば

“いつも協力の精神で”

第三期生 露木義行



大学1年時代

第二十一期生の皆さん、卒業お
めでとうございます。一〇五一名
の新入会員を迎え、日本大学三島
高等学校同窓会も新たな一歩を踏
み出すのに十分な要素をもつ集団
になりました。しかし、“優れた
集団”となるためには、有能なけ

ん引者の存在はもとより、同窓意
識をもつ協力の精神旺盛な会員の
存在が是非とも必要なのです。年
々同窓会の活動も活発化し、現在
ある十二支部も各地区の同窓会員
の協力をえてその活動は軌道に乗
りつつあるので、卒業生の入会に
よってなお一層の堅実な発展が期
待できるものと思います。創立以
来の同窓会員諸兄との連携を保ち
同窓会が今後ますます発展するよ
う、陰になり日向になり“協力し
ていただくことを要望いたします。

〈新入会員挨拶〉

広い人間関係の中から

第二十一期生 小野邦枝



私達、五十五年度卒業生は第二
十一期生として、同窓会々員の仲
間入りをさせていただくこととな
りました。高校生活までは主に同
年代の友人と友情を深めてきた私
達にとって世代のはなれた先輩方
と人間の交流を深めることができ
るとするのは、とても嬉しい事だ
と共にまた、広い人間関係のつな

がりの中から何か得ることができ
たらすばらしい意義があるでしょ
う。一九八〇年代は激動の年とい
われて始まりましたが、この先、
社会へ飛び出してゆく私達にとつ
て、今日この時代で各方面で活
躍されていらっしゃる先輩方から
学ばなければならぬことも数多
くあるでしょう。私達も、同窓会
員になる以上は行事などには積極
的に参加し、先輩方が築きあげて
きた伝統を後輩へ伝えてゆくつも
りです。
先輩の皆様、まだまだ未熟な私
達ですが、どうかよろしくお願ひ
いたします。

第二十一期生 クラス幹事

三の一	杉山 文英
三の二	加藤 武史
三の三	大畑 雅俊
三の四	山田 浩二
三の五	山田 貴也
三の六	小泉 哲也
三の七	一杉 章司
三の八	遠藤 成彦
三の九	田村 誠
三の十	勝又 壮一
三A	杉本 明美
三B	山本ひさの
三C	角田 厚子
三D	杉崎美奈子
三E	井坂美智子
三F	杉山真紀子
三G	大橋 聡子
三H	小林 澄子
T三A	稲葉 厚司
T三B	小林 由和
T三C	北山 利充

副会長 二人制になる

田中哲雄氏と植田正年氏

昨年、同窓会員は二万一千名を超える大所帯となったわけであり
ます。おのずと同窓会の仕事も多忙をきわめるようになりました。
ゆえに、会長の補佐役としての副会長を二人制にしたらどうかとい
う声が以前からあったのであります。そこで、田方支部長であつた
一期生の植田正年氏が新たに副会長に就任しました。二人ともに人
間的活動力にすぐれ、まさに会長の両腕としてふさわしいのであり
ます。

御挨拶

田中哲雄



御挨拶

植田正年



早いもので、副会長という大役
を仰せつかつて三年がたちました。
同窓会員の数も大変にふくれ上つ
ているわけですが、これからが同
窓会の真の価値が問われるような
気がします。世界が激しく変動す
る中で、我々の心のよりどころと
なるよう、力を入れていきたいと
考えています。私自身としては、
会長を助けるとともに、会員の皆
様の御協力を深くお願いする次第
です。

〈田中氏の紹介〉

現住所 三島市泉町一二の二三

勤務先 株式会社倉田一級建築

設計事務所 代表取締役

(一期生)

今まで、長く田方支部長をつと
めてまいりましたが、副会長の二
人制にともない、昨年の四月より
会長の補佐役として仕事をしてお
ります。
今あらためて考えますのに、我
が母校はつくずくと大きいという
ことであります。それゆえに、会
員の皆様の一人一人の力がぜひと
も必要なわけであります。大きさ
ゆえに一人一人の気持を大切にす
るよう、これからの同窓会を育て
ていきたいと考えております。

〈植田氏の紹介〉

現住所 田方郡修善寺町門野原

四〇〇の一 嵯峨沢館 館主

(二期生)

支部だより

田方だより

支部長 野田昭二郎



三島だより

支部長 久保田 光



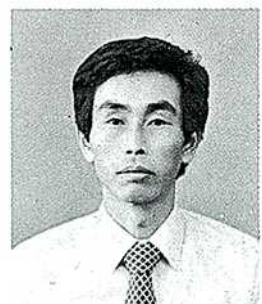
昨年四月長く支部長の任にあつ
た、植田正年氏よりその任を引き
受けて一年がたちました。昭和五
十五年度における同窓会は、特に
田方をはじめとして二、三の支部
をさらに強化しようという目標が
ありました。田方は大変に地域が
広いため、全体的な会としては五
月と九月の二回ひらいたにとどま
りました。また組織的には、湯ヶ
島・中伊豆・修善寺・大仁・垂山・
函南の六地区に分け、まずは地区
ごとの強化をはかっていくことに
なりました。今年もまたひき続き
支部のまとまりのため一層努力し
ていくつもりですのでよろしくお
願いします。なお、副支部長とし
ては、二期の高雅敏氏と三期の山
田守宏氏がその任にあたっていま
す。かさねて御協力のほどよろし
くお願い致します。



三島支部としては、毎年恒例と
なっている納涼船を昨年の七月、
盛況のうちに催すことができまし
た。この行事を通じて、会員がそ
れぞれの役割を持って動き、その
結果として船を出すことができる
わけです。まさに、同窓会号と名
づけるにふさわしいのではないで
しょうか。もちろん、今年も七月
の下旬に沼津港より船を出します
どうぞ皆様、お楽しみに。

小田原だより

支部長 川口 功一



当支部は昭和五十五年六月二十
一日に総会を行いました。その
感想を写真に添えたと思います。
我が小田原支部も毎年同窓生が多
くなり、住所の確認が不完全のま
ま計画に着手し、数百通の連絡を
出しましたが返信の少なさにがっ
かりした感もありました。

しかしながら、若い女性からの
出席の連絡もあり、ほっとした一
面もございました。当日一番乗り
した彼女の一言「もっと多くの同
期生が来ると思いましたわ」、こ
こに紙面をお借りして、返信を下
さった方々、御出席下さった方々
に改めて御礼を申し上げます。

今後小田原支部に卒業生の御
協力をお願いして筆を置くことに
致します。



日本大学三島高等学校 同窓会 小田原支部 5.15.6.21

バレーボール部大いに活躍する

昭和五十五年度におけるバレーボール部は、次に監督が語る通り大変に活躍した。が、監督は言う。過去の栄光を忘れ「初心」にかえり……と。戦いの果ての栄光は一瞬のうちに過去の存在となる。がしかし、それでも戦う。戦う精神こそは永遠の青春そのもののなのだろうか。これからより一層の活躍を祈ってやまない。

バレーボール部活動報告

監督 勝 又 年 男

〈戦績〉

春季東部選手権大会	優勝
高校総体東部地区予選	優勝
高校総体県予選	優勝
東海高校総体	第3位
中部日本選手権大会	第3位
全国高校総体	ベスト8
国民体育大会(本校中心の選抜チーム)	ベスト16



以上が今年度の戦績であるが、昨年「春の高校バレー」東海地区予選で、絶対的な強さをほこりながらも経験不足の為いま一つのところで涙を吞んでしまった。この苦い経験を基に六月の高校総体に向けて毎日毎日苦しい練習が続いた。選手達も、こんなにやらないでも、なぜなんだと思ったにちがいない。しかしそれでも私について来てくれた。高校スポーツは何といっても監督と選手の「相互信頼」であり「和」である。だから選手も自分の責任と義務を果そうとする。ミスをしてドスマイドンマイと全員が励まし合う、これが「和」であろう。

ガムシヤラな「チャレンジ精神」で全国大会出場を果たす気持で猛特訓、基本をたたき込む以外に道はないと思った。自然と練習時間も長くなり「愛のムチ」もとぶ、又これでもかこれでもかとボールが飛び、汗が飛び散る。いろいろ



なことをやってもダメ、これ一つ、これをやれば絶対に勝てるものを作ろうと思ひそれに多くの時間を費やして来た。結果、念願の全国大会に出場できた。そして全国番付にものり日大三島高校バレーボール部の第一歩が出来たと思う。これからが大変だ。これからが勝負だ。過去の栄光を忘れ「初心」にかえり今一度全国大会を目指したいと思う。

これまでの皆様方の御声援を感謝し、今後ともよろしく御願い申し上げます。



部 活 状 況

〔文化・広報関係の部〕

美術部 第十一回全国高等学校デザイン写真コンクール 第二位「学校奨励賞」

放送部 第二十七回全国高等学校放送コンテスト研究発表「朝の校内放送十分間の活用」入選

〔体育の部〕

バレーボール部

(男子) IH県大会優勝
IHベスト8

バスケットボール部

(男子) IH県大会第四位
新人戦県大会第四位

卓球部

(男子) IH県大会第二位

テニス部

(男子) IH県大会ベスト4
県私学大会優勝
新人戦県大会

体操部

(男子) 総合第二位

剣道部

(男女) IH県大会ベスト8

スケート部

IH県大会総合優勝

個人の特記すべきものとして

美術部○第十一回全国高等学校デザイン写真コンクール 第三席 鈴木規子

○「国民安全の日」の図画 入選 平松 潤

○第十四回全国高校生ポスター絵画コンクール 銅賞 堀田昌弘

写真部 第四回全国高校野球フットコンテスト作品「ばつ」入選

放送部 第十八回全国高等学校放送コンクールラジオ部門朗読「おーいでてこい」 全国五編入選 加藤摩利子

スケート部 IH県大会 五千・一万M 第一位 鈴木康之

テニス部 IH県大会シングルス 第二位 大塚裕之

柔道部 IH県大会軽重量級 第三位 堀内義次

陸上部 IH県大会百十MH 第二位 三枝宣男

体操部 新人戦県大会個人総合優勝 両村 泉

水泳部 IH県大会 百・二百M平泳 第一位 須田有美子

○国体夏季大会少年男子B四百M個人メドレー 第二位 土屋主税

卒業生だより

ジャイ・ネパール

六期生 柴田 正



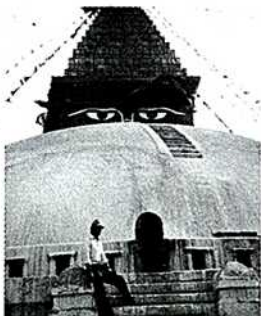
高校3年時代

J・O・C・V (青年海外協力隊) 隊員としてネパール王国、首都カトマンズの His Majesty's Government Department of Housing, Building & Physical Planning で都市計画に従事し、二年の任期を終え帰国する際、トリバン空港で在ネパールの協力隊の仲間達に見送られ飛行機に向う時、二年前ネパールに初入国したときのことを思い出さずにはいられませんでした。入国前日、初春の羽田を立ち真夏のバンコックに一泊。翌日、予定より四時間遅れでバンコックを飛び立ち、途中カルカッタで給油し、カトマンズのトリバン空港に着きました。「静かなところだなあ」というのがネパールの第一印象でした。入国翌日から日本大使館、ネパール外務省、大蔵省、赴任先の計画局等の挨拶廻り時差ボケなど味わう隙もなく一カ月の現地訓練に出掛けました。訓練先はバインセといひ、カトマンズからバスで六時間程南下した小さな村でした。この国にはトンネルがないため山を登り下りしなければならず、その為に時間がかかり

ました。訓練地では Bath Rest Room などはなく、飲水は川の水で、水運びは子供達の仕事でした。Rest Room は住民をまねて河原の岩陰で早朝ということにしました。水が変ったこともあり、早朝だけというわけにはいけなくなりました。Bath は河ですみました。パイセでは子供達と小学校に行ったり、山で遊んだりしました。ここでは小学校の三年生から英語教育が始り、六年生では上手に話することが出来ます。また、学校に限らず家庭でも嫉にはやかましく、悪いことをした時など子供達がぶたれるのをよくみかけました。東京で四カ月の訓練でネパール語を勉強してはきましたが、テレビもない(ネパールは、ラジオ局はありますが、テレビ局は、一九八一年現在まだありません。村のすべてでネパール語という生活で、訓練中のネパール語に本場ネパール語が加わり、少しは上達しました。食事は、カレー味のスープと、トウモロコシのスープを白米(いわゆる外米)にかけ、右手を使い食べました。臭いが強く、右手がカレー味になってしまいました。体重大幅減でカトマンズに帰り、いよいよ仕事に入りました。都市計画という仕事上、任期中、保健省、病院、上・下水道局等に出入りしカースト制にとらわれることなく社会学者、住宅専門家、チーフエンジニア、オーバースーパー等、さ

さまざまな人々に接する事ができました。ネパールでは、カーストが違ふと食物も違い、ボウズ(ネパール語ではパーティーの意味)などでも一緒の物は食べませんでした。仕事では英語を使い、買物などにはネパール語を使いました。仕事にも生活にも慣れ、さてこれからという時にはもう目前に帰国が迫っていました。チベットの家に下宿し、チベットのお正月、結婚式を見たり、スワヤンナート、ボードナートのお寺めぐり、パタン、バクタプールの古都見学、出張時に見たカンチエンジュンガの雪山等余暇利用は上手にしたつもりですが、カトマンズの全てを見る事はできませんでした。

発展途上国での生活は、何もかも揃っている日本に比べれば、不便な事も多々ありましたが、住めば都の言葉通り半年位で体も慣れ「ナマステ」という挨拶もためらわなくできる様になりました。日本より遅れているという印象は否めませんが、生活していく上では何ら支障なく、人と人とのふれあいなどは、むしろ日本よりすばらしく思えました。勉強中の後輩の皆様もチャンスをつかみ世界に飛び立って下さい。ダンネバート (Thank You)

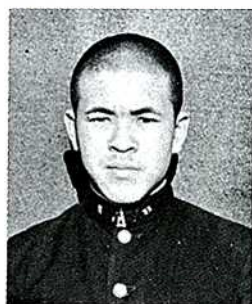


カトマンズのボードナート寺院 (通称 目玉寺)

現住所 駿東郡清水町新宿八二〇 (密)五九一七一一二四五八

電気部に頑張ったところ

母校教員 石橋 勝好



高校3年時代

私が本校に入学したのは、たしか昭和三十六年だったと思います。小さな胸に大きな期待をもち、工業電気に入學しました。いま高校

思い出

英語に苦しんだころ

第六期幹事 山田 央一



学校を出てから十余年、月日の経つのは早いものである。小生同窓会の幹事となり、意外にも学校と縁が切れないでいる。私の高校時代は今よりものんびりしていません。ある英語の教師とは三年間顔を付き合わせていました。そんな

時代を振り返ってみるときまって思い出すのがクラブ活動です。我が電気部は私が入学した年に設置され、当時は部員約十五名でした。その内一年生が九〇%だったと思います。そしてこの年の大学祭準備のため、大仁、富士の各電気会社、電力会社に行き、電気機械、家庭電気用品を借用しに行ったのです。また、毎日遅くまで友人達と展示会場を作りました。今思うと楽しい毎日でした。そして、この当時一緒に頑張った友人との絆はそれ以来切れる事もなく現在も続いており、人の大切さ、同窓の大切さを痛切に感じております。

なある授業中、英文法の時間、私を指名しました。「日本語の文法もわからないのに、英文法を答えろと言われてもわかりません」と答えると、恩師言わく、「おまえは無事卒業させてやる」との返事だった。今では大学受験のためわからないではすまないはずだと思ふと胸をなでおろします。今では私も六期代表幹事となり又二児の父親となりました。自分の学生時代を思いながら、子供の教育に頭をなやましております。ただ言える事は、勉強も大事であるが、スポーツをやり、若いエネルギーを力一杯ぶつけるのも大事ではないだろうか、そして大いに読書もして社会に出てから役立ててもらいたいと思います。

同窓会規約

第一章 総則

- 第一条 本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。
- 第二条 本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。
- 第三条 本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもって正会員とし、現教職員および元教職員をもって特別会員とする。
- 第四条 本会は、母校建学の精神にのっとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することをもって目的とする。
- 第五条 本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。
 - 一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事
 - 二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加
 - 三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第二章 機関

- 第六条 本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。
 - 一、総会
 - 二、幹事会
 - 三、支部会
 - 四、事務局
 - 五、編集委員会

第一節 総会

- 第七条 総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。但し、必要により各支部を代表する支部長をもって、総会の決議にかえることができる。
- 第八条 総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。
- 第九条 総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に關し、会長が認めた時、又は会員多数の要求があつた場合、会長は臨時に召集しなければならない。

第二節 幹事会

- 第十条 幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。
 - 一、予算・決算に関する事。
 - 二、事業計画に関する事。
 - 三、会則の改廃に関する事。
 - 四、その他、第五条によつて必要と認めた事項。
- 第十一条 幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半数の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があつた場合は、臨時に幹事会を召集しなければならない。

第十三条

- 第十二条 幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、庶務・会計二名、その他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。
- 第十三条 幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員

- 第十四条 ならびに常任幹事によつて構成され、必要により幹事会に加入することができる。
- 第十五条 幹事会が本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。

第三節 支部会

- 第十六条 本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る。支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。

第四節 事務局

- 第十七条 事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める。
- 第十八条 事務局は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第五節 編集委員会

- 第十九条 編集委員会は幹事会に所屬し、原則として年度一回の会報発行、その他、本会運営上、必要な広報の任にあたる。
- 第二十条 編集委員会は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第三章 役員

- 第二十一条 本会は左記の役員を置く。
 - 会長一名 副会長一名 幹事長一名 副幹事長二名 幹事、常任幹事、会計監査二名
- 第二十二条 会長、副会長は、幹事会の推選により、総会の決議をもって選出する。会長は本会を統理し、副会長はこれを補佐する。
- 第二十三条 幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。
- 第二十四条 副幹事長は幹事会を補佐する。
- 第二十五条 幹事は各卒業学年の代表者が当たり、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。
- 第二十六条 常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり、地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。
- 第二十七条 会計監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。
- 第二十八条 各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。任期は二年とする。但し、重任はさまたげない。

第四章 会費

- 第二十九条 本会の経費は会費ならびに寄附をもつてこれに当てる。
- 第三十条 正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。

第五章 表彰・その他

- 第三十一条 本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。
- 第三十二条 本会に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認を得、これを表彰することができる。
- 第三十三条 会員として名誉を毀損する行為があつたときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができる。
- 第三十四条 顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に應える。

第六章 附則

- 第三十五条 規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認をえて行なう。
- 第三十六条 制度施行 昭和三十六年三月十一日
- 改正施行 昭和四十七年四月一日
- 改正施行 昭和五十三年四月三十日

表彰規定

前文

本規定は日本大学三島高等学校同窓会規約第五章三十二条に基き、その適用細則を定めたものである。

第一条 本会々員にして、社会的に顕著な業績をあげた者に對し、所定の手続きを経て表彰することができ。

第二条 日本大学三島高等学校に在籍する者で、将来、国家社会に貢献し、母校及び本会の発展に寄与できる有為な人物及び団体に對し、奨学金又は奨励金を支給することができる。

(一) 奨学金の支給をうける者は、最終学年に在籍し、在籍期間中、学業成績・人物・自治活動・健康に優れ有為な人物として学校長より推薦された者とする。ただし奨学金は一名を原則とする。

(二) 奨励金の支給をうける団体は、生徒会所屬の団体で、顕著な業績をあげ更に一層の充実・発展が期待されるものとして、学校長より推薦された団体とする。ただし奨励金は一団体を原則とする。

第三条 第一条、第二条の表彰式は、年度末とし、総会または入会式に行う。

付 本規定は昭和五十二年二月十二日より施行する。